

W・ラーベと環境問題 ラーベ研究余滴

著者	諸沢 巖
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	9
ページ	21-31
発行年	2005-03
その他のタイトル	W.Raabe und Umweltprobleme: eine zusatzliche Raabe-Studie
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/1477">http://hdl.handle.net/10112/1477</a>

## W・ラーベと環境問題

— ラーベ研究余滴 —

*W. Raabe und Umweltprobleme*

— *eine zusätzliche Raabe-Studie* —

諸 沢 巖  
MOROSAWA Iwao

外国語（ドイツ語）要旨：

Wilhelm Raabe hat schon über 100 Jahre früher die drohende ökologische Katastrophe deutlich erkannt und als Menetekel in seiner eigenen Art niedergeschrieben. Sein Werk enthält nämlich eine Fülle der Passagen, die grundsätzlich die erst heute global bewußt und politisch sogar brisant gewordenen Forderungen in Sachen Umweltschutz artikulieren.

Raabe erlebte unmittelbar die „Industrielle Revolution“ in Deutschland und durchdachte die Folgen dieses rasanten Umbruchs und ihre Auswirkungen auf das Leben des Individuums. Er beschrieb den hemmungslosen Wildwuchs moderner Stadtentwicklung und die ökologischen Veränderungen. Er registrierte auch ein pilzartiges Sichausbreiten der Siedlungen. Besonders eindringlich schilderte dieser Realist die verhängnisvolle Wirkung der mit zunehmender Industrialisierung an Gewässern vorgenommenen Veränderungen. In der Schilderung der Gewässerverschmutzung und der Zerstörung des Feuchtbiotops symbolisierte er dichterisch die unmittelbare Bedrohung des menschlichen Lebens schlechthin. Der von Raabe prophezeite und gewarnte Zustand kennzeichnet ja wohl genau unsere Gegenwart. Da unsere Zukunft sich auch weiterhin in einer industrialisierten Umwelt abspielen wird, kann man sagen, wie aktuell noch dieser Schriftsteller mit seiner Thematik ist und bleiben wird.

キーワード（日本語）：

ヴィルヘルム・ラーベ、産業革命、環境の急変、生態学的警告、ラーベの現代性

キーワード（英語）：

Wilhelm Raabe, the industrial revolution, environmental changes, ecological warnings, actuality of Raabe

19世紀ドイツ写実主義作家ヴィルヘルム・ラーベ（Wilhelm Raabe, 1831～1910）の作品を通読するとき、この作家が今日全世界的になっている環境破壊の危険性の問題を1世紀以上も前に既にはっきりと認め、迫り来る災禍の予告として独自に書き表してことが分かるのである。

つまりラーベの作品には長短の差こそあれ全体として観れば現代の環境ないし生態学的な諸要求を基本的に表明している一節が多く含まれており、それらは1980年代になってようやく一般的に意識され、政治や行政面の一連の施策を生み出さしめ、今日のドイツをして「環境先進国」<sup>1)</sup>にまでならしめた「環境保全」問題の諸要請をまさに古典的にまた文学的に裏付け得るものであると言って差支えなからうと思われるのである。

文学においてこの環境破壊の現象を詳しく取り上げたものはこれまでほとんどなかった。それはこのテーマが最近にいたるまで文学として看過されてきたことを、そして産業もしくは工業化の波に懐疑の念を抱いていたのはごく僅かなアウトサイダー的な存在だけでしかなかったことを意味しているであろうし、また「環境保護」という概念が一般的に定着しだしたのはこの四半世紀前からでしかないことから、この作家がこの点でも19世紀後半の「進歩」を謳歌する楽観的な時代精神を越えていたことを示しているであろうし、広く知られている小説家H. ヘッセ (Hermann Hesse, 1877~1962) の「恐らく後世のドイツで認められるであろう」<sup>2)</sup> という言葉を想い起し得ることもある。また一方で20世紀後半に始まった再評価は「ラーベの物語芸術が19世紀後半の最も重要な文学表現の一つであることが益々明瞭になってきた」<sup>3)</sup> とH. ヘルマースがその成果の一端を表しているように元来言われてきた「詩的写実主義」なる枠を越えて現代にも十分通じ得る普遍的独自性を明らかにするに足る専門的なテーマを追求してきているが、環境破壊の問題に関しては文芸学外の問題をも含むことからかまだ取り扱われていないと見受けられるのである。小論は読者に背を向けられていった中期 (1867~70) 以後の作品の2、3例を主に取り上げながらラーベが現今の時事問題との関連からも読まれ得る作家であることを指摘しようとするものである。

## (1)

ヴィルヘルム・ラーベはエッシャースハウゼン (Eschershausen)、ホルツミンデン (Holzminde)、シュッタットオルデンドルフ (Stadtoldendorf) というヴェーザー川 (die Weser) を西に望む丘陵地帯の牧歌的な「古巣」たる小さな町で育ち、1854年に始まる作家生活のほとんどをベルリン (Berlin, 1854~56)、シュツットガルト (Stuttgart, 1862~70) そしてブラウンシュヴァイク (Braunschweig, 1870~1910) という大都市で送るのであるが、その間これら大都市でドイツのいわゆる「産業革命」を直接体験する。目の当たりにするのはドイツが千年にも及ぶこれまでの農耕社会を脱して産業もしくは工業社会へ変貌してゆく姿であり、大衆社会、消費社会への変化の過程である。ドイツは後進国であっただけにその過程はなおさら急激なものがあつた。かくてラーベははじめて詩人としてこの根本的な変革の結果と個人の生活へのその影響を考えるようになる。これはまさに現代文学になってはじめて見出されたと思われるテーマであろう。時をほぼ同じくしてとくにK. マルクス (Karl Marx, 1818~83) とF. エ

ンゲルス（Friedrich Engels, 1820-95）がこの産業革命進行過程に随伴して生ずるさまざまな衝撃的事象を哲学的に解明し、政治綱領の形でその表明を試みたが、ラーベもすでに急速に生じてきたいわゆる「無産階級」が「下からの」社会変革の原動力となる可能性を認めていた。しかし、マルクスやエンゲルスとの相違は人間を単純に階級にわけけることを拒んでいること、むしろ各人は唯一無二の個人と見ていることにある。それは「至るところで定規を当てる者に災いあれ」<sup>4)</sup>という言葉の意味するところや描かれる主人公が主に独立独歩の、あるいはそういう運命を辿らざるをえない個人またはときとして変わり者であること、また対象とされているいわゆる Adressat も個人であることから理解されることである。発生する大都市、産業の中心地へと流入する人々、またその人々で編成される「プロレタリアート」が益々貧窮化してゆくを見てラーベはすでに初期の小説『ある春』（Ein Frühling, 1857）で上記の可能性を3度目の「ノアの洪水」に譬えて次のように予言したのであった。

「2度の洪水を人類は経験したが、3度目のものが差し迫っている。最初の洪水はすべての民族の古文書が伝えている。つまり自然の荒々しい力が若い人類とその文化を打ち負かしたのだ。第2のものは歴史が民族の大移動と呼んでいる。そして第3のものは？

それがやって来るのだ、やって来るのだ。目を覚ますがいい、目を覚ますがいい！、祈るがいい、祈るがいい！神の霊が水面を覆うようにと。」<sup>5)</sup>

ラーベはすでに処女作『雀横丁年代記』（Chronik der Sperlingsgasse, 1854）でいわゆる農村離脱（Landflucht）にも言及している<sup>6)</sup>がシュツットガルト時代以後の一連の作品にはそれとも関連して常に拡大してゆく諸都市の、いわば今日でいうスラム街の社会的窮状が多く描かれており、まさに未曾有の社会現象としての大都市の発生が繰り返し小説の背景をなしているのである。古い都市の外周部に限らず中心部の周囲にも簡単な建築法で殺風景なアパートや工場用の建物が次々と出現しゆく様相はこの作家が上記大都市で実際に目に留めたことそのものであろう。つまり益々周辺地域を侵食してゆく都市の外縁部を描くとともに、「この取り壊されると見えたが、もう建てたばかりとなっている家並みの砂漠」<sup>7)</sup>という表現で容赦のない破壊が数世紀前から有機的に成長してきた旧市街ないしは中心街にあっても止まらない急激な発展を的確に示しているものであり、これがラーベをして小説『巨匠アウトル』（Meister Autor, 1874）では「われわれのドイツの町中の路地では皆が好き勝手なことをしている！」<sup>8)</sup>と叫ばせるのである。

この作品ではとくに「優先道路」（Prioritätengasse）と名付けられたものを設けるために中世の貴重な建物が取り壊され、付属の古い公園の樹木が伐採されることになるのであるが、町の道路建設局の役人はその意図を次のように述べる。

「われわれがこれほど整地測量に骨の折れたことはなかったよ。しかし、それだけに新規に計画された道路施設の形でそれが完成したら町の人々をこれほど驚かせ、喜ばせるものははないだろうよ。あのガタガタの町囲壁の後側の水路は勿論埋め立てるぞ。あそこにはまだ古臭い慈善団体のオンボロ養老院があるが、これも無論片付けなきゃならないね。あそこの婆さんたちは町の門の先の体にも良い本当に牧歌的な地帯へ移ってもらうさ。そうすればここの町の中心点から一直線に駅へ行けるのさ。今この時間にこの周りのガラクタの中にいる奴は誰もそれに気づいてはいないがね。」<sup>9)</sup>

一見して当然とも思えるこの言葉が他のことに配慮する事なく計画された新規事業の実現という目的のみに酔いしれたこの役人の自己満足の吐露であるのをラーベは勿論独特の反語で言い表しているのであり、それはさらにこれに続いて添えられている次の対話が明らかにしている。

『まさにそうですな。』と私は極度に感激して叫んだ。『全く喜ばしいことですな』と。『しかもこれは商業投機の奇跡ばかりじゃありませんぜ。現代の建築学の奇跡でもあるんですぜ。』と親切な情報提供者は大声で言い、私の感動を自分のもの以上に高めたのだった。

『ここでわれわれがどんなことを目論んでいるのか、お分かりにはならないでしょうな。』

『そんなことはありませんよ』と私は胸の奥底から呻くように言った。『私にははっきり想像できますよ。つまり、実際今周りに見えているものが何もかもなくなってしまうでしょう。』

『何もかもね。』とさらに力をこめて私の有頂天になって、興奮した建築士は答えた。『今やニュルンベルク (Nürnberg) の町も取り壊され始めたんですよ。だから、われわれがまさにこんなによく保存された廃墟をどうして今まで以上に寛大に取り扱わなければならないのか少しも合点がいかんのですわ。』<sup>10)</sup>

伝統と景観の象徴であるニュルンベルクが持ち出され、資本主義と自然科学との内的結合を軸に進歩の名のもとに際限なく荒々しく発展する近代都市に批判の矢が向けられていることは明らかであるが、ここではまだ表立っては狭い意味での環境保全の問題が提示されていないと解されるかもしれない。しかし市民や政治家までが交通地獄のための高速道路やバイパスあるいは交差路やロータリーの新設または増設のすべてが必ずしも幸福を齎す施策ではないと気づくのはラーベがそれにも通底する警告を発してからまる1世紀も経てからであることが認識さるべきであろう。その間にどれだけの建物や平地が進歩ということの犠牲になったかを想像させるものとして『プフィスターの水車小屋』(Pfisters Mühle, 1884)の中で都市設計者たちの

貪欲な要望に抵抗して不気味な緊張感を漂わせて存続している教会墓地の例が挙げられよう。

「一つの墓地があるのだ。あの目立つ都市ベルリンの中心ではないのだが、ある郊外にある町の一つの真っ只中にあり、しかも非常に古いものの一つではない。緑の藪と樹木が豊かな場所で、4 辺形をなし、新しい非常に現代風の建築に囲まれており、実際にはまだ実行されてはいないが、理論上では都市計画の設計図上にもうしっかりと敷かれた道路線に縦横に横切られているのだ。」<sup>11)</sup>

つまり、『巨匠アウトール』の物語りで下水路とガス管のある新しい道路に取って替わらねばならぬ運命の詩情に富んだ庭園とは逆に、計画された道路建設の実現がこの場合はなお30年間先延ばしのままになっているのである。語り手の義父がその墓地に埋葬される権利証明書を手に入れているからにはほかならないと説明されているのであるが、その猶予期間は1世代の年月に過ぎない。

「わしがまだここに埋葬される権利があり、あの進歩主義者どもにわしの死後なお30年の間腹立たしい思いをさせることができることこの権利書には書いてあるわけさ。」<sup>12)</sup>

## (2)

これまで変貌しつつある諸都市の描写の一面を例として引用してきたが、これらが環境保全問題を明瞭に表明してくるのはラーベがこの急激な発展が続く中で生態系の変化を述べる場合である。絶筆となった小説『アルタースハウゼン』(Altershausen, 1900)では町の緑地帯で小動物の姿が消え去った様子が公園管理人の口を借りて医事顧問官たる主人公に向かい次のように説明されている。

「そうなんです、顧問官先生、これは今のこの町の状況のせいなんです。今ここでは小鳥や、蝶や毛虫や甲虫やその他の [...] 卵や繭から生まれてきて這い回り、餌を漁り、飛び回ったり動き回ったり、悪さまでもする生き物はみんなそうなんです。これらの生き物たちは今の人間が昼間や夜間の快適に過ごすために必要としている幾つかのことにもはや我慢がならないんですよ。[...] 私たちにはおいがわからなくても、ここの生き物たちにはそれを嗅ぎ付けることができあちこちに去って行ってしまいうんですよ。この町の上空のずっと高いところでさえそんなふうになっているのです。顧問官先生、私も老人となりましたが、もうずっと前からここにだけいたコクマルカラスのことを思い出さざるを得ないんです。[...] 私たちのにおいはあいつらにはもう快いものではないんです。しか

も私たちは夜にはガスや電気の光やその他のこの種のあらゆる発明品で明るい朝となるまであいつらから眠りと夜の安らぎを奪ってしまったんです。私たちの町では夜にはもう眠りの時間がなくなっているということが、あいつらを家々の屋根や塔から追い払ってしまったんです、臭気が甲虫や毛虫や蝶たちをこの茂みや他の園芸物からそうしたように。ずっと向こうの郊外の町では勿論まだ生き延びていけるでしょうが、あんな所にもまたまた煙突や煤煙を伴って工場がやって来て生き延びようとする気持ちに嘔吐を催させてしまうんです。だからあいつらにはもう恐らく何んにも残されてはいないんですよ。」<sup>13)</sup>

今日ともなれば上記ラーベのこの警告は重苦しいほどの現実性を伴って伝わるであろうが100年も前にこの深刻な真実を理解できたのはごく僅かな人たちだけであったろう。しかしながらまた一方でこの作家が繰り返し取り扱う問題を独特に異化して持ち出して来ることだけに注目してはならないであろう。かかる場合に動物相や植物相そのものだけに関心が示されているのではなく、これらが人間の置かれている状態を象徴化していることが重要なのであり、結局は生存を脅かすある技術が増大することによって人間にふさわしい在り方が破壊されるということが反語的に糾弾されているのである。それは上掲の引用に続いて「動物たちはほんの少しだけ人間の先を行っているに過ぎないのです」という言葉に如実に表明されていよう。

ラーベは産業革命の大都市における随伴現象たる諸変化を述べているばかりではない。地方都市やいわゆる田園地帯におけるそれらをも描き出しているのである。それは大都市から離れた地域にも工場が所在地を選定した結果であったり、大衆社会の出現過程で大衆観光が次第に生じてきた結果であったりするが、数世紀にわたって維持されて来た居住環境を越えて居住域が次々と造成され始めていた事実の反映に外ならない。大衆観光を映し出している例として1888年に書かれた物語「皇女フィッシュ」(Prinzessin Fisch)が挙げられよう。この作品ではハールツ(Harz)地方のある小さな町「イルメンタール」(Ilmenthal)が19世紀後半に数多く見受けられたように保養地に変貌してゆく有り様が描かれているのであるが、それまで野生の草花や良い匂いのする薬草が生い茂っていた町中や周辺部のいたるところに「イタリアードイツーイギリス風ルネッサンス様式の邸宅」が観光用の呼び物とともに建ち並ぶようになる。この一般的な建築ブームの助成者はアメリカから戻ってきたアレックス・ロートブルク(Alex Rotburg)という男で、無論「概して関心も持たず、生粋の愛国的なイルメンタールの町の出身者でもなく」<sup>14)</sup>、ただ利己的な利益志向からそうなったのであったが、それでも目を眩らまされた住民たちは町の景観を最終的には壊してしまうこの男のすべての計画に感激して同意し、たとえば周囲の自然をも含めた彼の提案を次のように歓迎する。

「ロートブルクさん、どうか遠慮なく言って下さいな、ホルツヴァッサー(Holzwasser)やフンメルバッハ(Hummelbach)の溪谷の水を堰止め、ウルバーンシュタイン

（Urbanstein）の村経由で引いてきてよその土地からやってきた人々のために涸れない滝を造るというあなたの考えは誰でも納得できるに違いありませんよ。あなたがこの件を引き受けて下されば役場の美化委員会は必要な補助を欠かせやしないと思いますよ。かく言う私でさえしかるべき臨時のビール店やコーヒー店を直ぐさまその新しい造化の妙の場所に喜んで開く人をもう一人や二人知ってないわけではありませんしね。」<sup>15)</sup>

この例は今日都市を離れた少なくはない地域がサファリランドやその他のいわゆる体験公園なる形態で大衆観光のために開発され、つまり損なわれているのを想起させるものでもあり、それ故、この作品で観光客用アトラクションのために地方の自然そのものが景観を含めて破壊されてゆくことに立ち向かって行く、つまり進歩の幸福感の陶醉に対抗する者をも登場させることをラーベが欠かしてはいないことは容易に理解できる。変わり者風のドゥリューディング（Drüding）教授がその種の者で、ロートブルクを真の「町を荒廃させる者」（Poliortetes）と呼び、谷の設計について「まったくフンメルバッハやウルバーンシュタインに対しての言語道断な振る舞いだ。この魅力的な横谷全体があの下司野郎に台無しにされてしまう。単なるそのような下らないペデカーの宣伝のために美観が損なわれてしまうのだ」と言う。この教授の抵抗は無論無益に終わるところに反語的な批判があることは言うまでもない。

地方地域でそれまで長い間維持されてきた状態を破壊しながら永久に消滅させてしまうものに新しい交通路がある。小説『古巣』（Alte Nester, 1879）を例とすれば語り手ラングロイター（Langreuter）は青少年時代を楽しく過ごした「生成の城」（Schloß Werden）を長年の後に再び訪れるが、すっかり変わった周囲の様子を目にして次のような感慨を漏らすのである。

「新しい幹線道路が私の胡桃の樹があった場所をずっと貫いて通っている。だから間もなくこの道路の上方にも鉄道の築堤ができて、やがてライン河方面へ行き来する客車や貨車がこの場所を轟音を立ててあるいは喘ぐようにして通り過ぎるようになるだろう。」<sup>16)</sup>

とくにしばしばそして力を込めてラーベが描いているのは進行してゆく工業化により河川に起こる変化が惹起する深刻な結果である。繰り返して批判の矢が向けられるのはまず当時いたるところで着手された河川の改修に対してであり、例としてはヴェーザー川の支流で「3人の令嬢に警えられる」ライネ川（die Leine）、イーム川（die Ihme）それにインネルステ川（die Innerste）がはじめに挙げられよう。この三つの川には19世紀に改修工事がなされたが、小説『インネルステ川』では「そのことでこれらの川は決して前よりも奇麗にはならなかった」<sup>17)</sup>と述べられている。また小説『アーブー・テルファン』（Abu Telfan, 1867）では「悪魔を一つたり19世紀を — 連れて来て、鱒に悲惨な害を与えた」小川が描かれている。この小川は「はるか上流でその水を使い果たしてしまう巨大な新しい工場に飲み込まれてしまってお

り」<sup>18)</sup>、その上流では

「川の水は素早く水車に押し込まれ、さらにフル回転する人工の機械で高いところへ引き上げられ、人間の意志次第で下へ落とされた。水はその自然の川床から地上や地下で人工の水路へと押しやられ、汚れた忌まわしい姿となって澄んだ清らかな川を置き去りにしなくてはならなかった。」<sup>19)</sup>

何物にも妨げられない自然の川の流れるはラーベにとって特別な一筆に値するものでもあった。先に挙げた『巨匠アウトール』では過度に営まれるようになった林業に対する批判を込めて「模範となる森の中をさらさらと音を立てて流れることのできる恵みが上級営林局によってまだ奪われてなかった溪流」<sup>20)</sup>が描かれている。

ここでもう一度銘記されねばならないのは、ラーベがこれらのことを間もなく150年にもなろうとする前に書いていたということである。今日でも依然として河川は仮借なくそしてしばしば意味もなく管が入れられ、川床が変えられ、水路変更工事がなされており、これらの河川工事あるいは下水工事が地下水面や地盤の沈下あるいは洪水の速度や破壊力の増大を招いて、新たな川床や排水路等の対策工事が加えられねばならないことがあるのにはある意味でいわばグロテスクとも言うべき印象さえ受けざるを得ない。

ラーベが慧眼にも河川の汚染をもすでに工業化によって惹起される問題として捉え、作品に定着させているのは従ってはや驚くには当たらなかろう。インネレステ川の場合はその水源から河口にいたるまで次第に増大してゆく工場による汚染を同名の作品ではまだ異化され、またいわば話の糸口たる導入部でのみ述べているののに対して、1883年の『プフィスターの水車小屋』は工場廃水による環境汚染を描く最初の長編小説にならしめている。この作品ではラーベの時代に数多い町村に出現したような製糖工場の廃水が一つの川を汚染し、その川に長年依存してきた飲食店兼製粉業を営業停止に追い込む様子がプロットの背景をなしており、語り手は川の死を次のような言葉で表している。

「数年前から毎年秋になると魚たちが水車用水路で生活条件の変化に対する不快感を表明し始めたのだ。魚たちは物を言わないで、1匹また1匹と、あるいはまた集団となって銀の鱗のある腹を上に向けてこの小川の水面を静かに流れ下って行ったのだが、人々はこれに関しても自分の意見をあれこれと言うだけだった。そんな時私は、土曜日の午後木の葉散るさ中この水車小屋に日曜日に滞在しようと町からやってきて、年老いた父が悲しげにまた不機嫌に細い灰色の巻き毛の上で白い粉屋の帽子をあちこちと押しやりながら自分の銃の傍らに立っているのを見つけると、いつも哀れな今は亡き父親自身の意見をとくに頼みとしていたのだった。

『さあ、あれをまあ見てみる、哀れな光景ではないか。』

うれしい気持ちで見られるようなものではなかった。すべて清々しく澄み切ったものの権化としてのように私の少年時代や青年時代の最初の数年の間中ずっとさらさらという音を囁きながら流れていた清らかな川が、のろのろと這い回るような、悪臭を放つねばねばした青白い怪物に変わってしまっていたのだ。それは実際誰にももはや生き生きして清らかな姿として役立つような物ではなかった。ねとねとした糸のような物が川から手の届く岸の茂みの幹に、そして水面にまで垂れ下がっている柳の枝に掛かっていたのだ。葦はとくに気持の悪くなるような姿を晒していた。しかしこの点で言えば多くのことに耐えられた鴨たちでさえこの季節ともなればいつも双方の主要な生活要素に関して私の父の感情を分かち合っているようだった。鴨たちはむかむかした気持ちで彼のまわりを囲み、憂鬱そうに彼のいるところから水車用水路を眺め、小声でガアガア鳴きながら彼と同じようにため息をついているようだった。

『1週間毎に酷くなって行くんだ、そして勿論年毎にでもな!』<sup>21)</sup>

このように生息空間の破壊、あるいは今日のいわゆるビオトープの破壊をもラーベは描くが、それは専ら工業によるものばかりではない。益々集約的に営まれるようになった農業によっても行われ得ることを暗示する一例を小説『シュトッククーヘン』(Stopfkuchen, 1891)が挙げている。語り手エドゥアルト (Eduard) が数十年の外国暮らしの後昔の友人シャウマン (Schaumann) を訪ねようと『赤砦』(die Rote Schanze) に向かう途中かつて青年時代に馴染んだ野道を歩いて行きながらとくに次のような変化に気づくのである。

「振り返っていろいろと考えてみればあそこには以前赤砦へ通じている道の右側に約4ないし5アールのある池あるいは本当は沼だったものがあつたんだ。それが今はない。

以前はあらゆる神秘的にうごめいている不思議な生き物たちで充ち溢れていたんだが、あれが今は1区画の多少とも実りのあるようなジャガイモ畑になっている。それがどんなに有益であっても以前の方が美しかったし、より教化的でもあつた。このルールケン (Lurken) 池には、僕が不審の念を抱いて捜し求め、そしてその後でないのに気づいて悲しい気持ちになるのを要求する完全な権利があつたのだ。そのような良き知人であつたし、否、親友であつた。菖蒲や葦やテッポウグサが生い茂り、ヒキガエルやカタツムリやゲンゴロウが無数にいて、トンボが飛び回り、蝶がひらひらと舞い飛び、周りが柳に取り囲まれ、そしてよい匂いがしていた。[...] 分からないが、あつたところに残しておけたらうに。あの頃のままに残しておくべきだったらうに。家畜あるいはあの人たち自身のための数袋のジャガイモを重視する必要はなかつたらうに。でもそれがあの人たちには重要だったのだな。」<sup>22)</sup>

これも現今のいわゆる湿原あるいは湿地のビオトープとその破壊が先取りされていると解釈され得よう。たとえば単式栽培が問題とされ、農業生産量が次第に増大し、過剰生産が国家の要請で差し止められる一方で、さらなる土地利用を作り出すために相変わらず干拓や埋め立てが行われている今日になってはじめて知られ得るある種の先見性をラーベはこの点でも示していると言えようか。しかしこのビオトープの破壊もこの作家にあってはすでに述べたように人間生活の直接的な脅威を象徴しているものなのであり、植物や動物が死に瀕しあるいは死滅しているところでは人間の、なかんずく人間にふさわしい生活は存続しがたいものだという認識を言い換えているものに外ならないである。

### (3)

これまで引用してきた環境問題の諸例からみてもラーベがそのテーマの扱い方においてもいかにアクチュアルであるかが、示されていると言い得るであろう。なぜなら今日より先の未来も工業化のさらに進んだ環境のなかで展開するであろうからであり、いわゆる「自然に帰れ」ということはもはや不可能であるからである。そのことはこの作家も十分知っていたし、そのこと自体を変えようとしたのではない。大都市のアパートで暮しながらただ技術化とそれによる経済的成長のみを頼りとして進歩のみを楽観的に信ずる当時の風潮に詩人らしく大きな不安を感じていたのである。そして現今の状態をも次のように予測し、それに対して警告を発していたのであった。

「この状態がこのまま続いてゆけば、人間は20世紀終わりには創造の第5日目とわれわれの主なる神が創られた動物たちの大きな園とをまさに疑いもなく自らの判断で実際的に対決してしまうことになる。しかしそうなれば神の子らの自然史なるものは19世紀初頭のその挿絵とともに書誌学的な宝物となるであろう。」<sup>23)</sup>

ほぼ1世紀も前になされたこの予言は今日の状態を言い当てていると言って差し支えなく、この作家の先見性を十分にうかがわせるものである。なぜなら、今日国際自然保護連合をはじめ各国が公表しているいわゆる『レッド・データ・ブック』がまさにそれを証しており、そのドイツ版たる『赤色リスト』(Rote Liste)に依っても全体として約30%の動植物が絶滅しているかあるいは死滅の危機にあることが表明されているからである。<sup>24)</sup> 前掲インネルステ川も1970年代にはすでに生物学的には死の川であったという。もし生態系の消滅を示す時計が存在するとすれば、その針はすでにあと5分を余すのみの時間を指し示しているに違いない。いわゆる産業革命もすでに第4期を迎えている今日ラーベの作品は注目されてよいであろう。また一方でこの作家はその警告を通じて、人類が招き寄せた幽霊とも言うべき工業化から逃れる術

はないことを強く認識させようとしているのである。従ってラーベが環境問題を取り上げる場合でも中心となるテーマは、工業化あるいは技術化時代にあっても個々人がいかにして本来的な人間として存続できるかという問いにある。ラーベがその解答を示しているとは決して言い難い。むしろその問を開示し、一人ひとりの読者に解決を求めていると言えるのである。このように古典的な解決を許さない点においてもラーベ文学の現代にも通ずる作品構成を認めようとするのはいささか手前味噌に過ぎようか。

#### 注

- 1) 川名英之:『こうして森と緑は守られた ― 自然保護と環境の国ドイツ』東京（三修社）1999 7ページ
- 2) Hesse, Hermann: Besuch bei einem Dichter. In: Hesse: Gedenkblätter. Berlin, 1950, S.118
- 3) Helmers, Hermann: Raabe in neuer Sicht. Stuttgart 1968, S.10
- 4) Raabe, Wilhelm: Gedanken und Einfälle. In: Raabe: Sämtliche Werke. Serie 3. Berlin, 1934, S.125
- 5) Raabe, Wilhelm: Sämtliche Werke. Braunschweiger Ausgabe. Göttingen, 1956, Bd.1. S.257  
以後この全集はBAと略記し、引用は巻数とページ数のみで表記。
- 6) BA Bd 1, S.166
- 7) BA Bd.6, S.202
- 8) BA Bd.11, S.82
- 9), 10) BA Bd.11, S.76-77
- 11), 12) BA Bd.16, S.34
- 13) BA Bd.20, S.213
- 14), 15) BA Bd.15, S.31
- 16) BA Bd.14, S.36
- 17) BA Bd.12, S.103
- 18) BA Bd.7, S.64ff
- 19) BA Bd.7, S.351
- 20) BA Bd.11, S.12
- 21) BA Bd.16, S.52f
- 22) BA Bd.18, S.31f
- 23) BA Bd.20. S.23
- 24) Brockhaus Enzyklopädie in 24 Bänden. Leipzig 1996. Bd. 18, S. 558f.